

松井幸生さん
株式会社善勤商店社長
Matsui Yukio

金襴織物・裂地の製造卸商を営む。菅田屋勤兵衛から数えて13代目。京人形商工業協同組合副理事長。平成12年伝統的工芸品産業審議会臨時委員任命。翌年、伝統的工芸品産業の奨励賞を受賞した。



日本人形の衣裳にとことん迫る本企画。人形の衣裳に使われている文様や生地はもちろん、着せ方についても詳しく解説していきます。業界のスペシャリストを講師に迎え、衣裳の基礎から応用まで教えていただきます。知識の習得や再確認、セールストークにお役立てください！
前回に引き続き、男性の装束に焦点を当て、詳しく解説していきます。

男雛の衣裳

前回に引き続き、男性装束「束帯」を解説していく。束帯の各部分の名称について左頁の画像に沿って見ていきたい（一部画像では見えない部分の衣も解説）。

◆束帯の各部名称

袍（うえのきぬ） 一番上に着る衣。本誌本企画7-8号（56〜57頁）で解説済み。

下襲（したかさね） 袍の下に重ねて着るもの。平安時代には下襲の上に半臂を着け、その上に袍を着けていたが、現在ではほとんど省略されている。

そもそも平安時代のはじめには下襲と呼ばれる衣はなく、現在の下襲と呼ばれる衣の場所には汗衫

という衣が見えた。汗衫は下襲が現れると束帯の構成品からなくなっていた。

松井さん 下襲の解説をするときに忘れていけないのが「裾」です。――下襲の「裾」ですね。

裾（きよ） 本来、裾は下襲の後身を長く引くもので、裏を板引にして用いることが当たり前だった。鎌倉時代に登場し、スタンダードとなったのが「別裾」と呼ばれる形式。従来の裾は取り扱いが面倒だったため、背中の腰あたりで裾を切り離し、その裾につけた腰紐で下襲の身頃部分を一緒に留めるというスタイルになった。裾は身分によって形成や長さが異なり時代によってさまざまに変化していった。

上皇の御裾については別裾と続裾の両方が用いられました。下襲の裾は身分が高くなればなるほど長くなるものでしたから、扱いには苦労が生ずるものです。

相（あこめ） 単と下襲との間に込めて着用するもの。色は年齢によりさまざまで未成年者の濃色、宿老と呼ばれる人の白色の他に、緋色、萌黄、蘇芳、薄色などもあった。天皇・東宮の相は、色は緋色で表が小葵文の綾を板引きとして、裏は紅平絹を使ったという。

松井さん ここで重要なのは、天皇・東宮の下襲は、本来の形式を継承しているということ。下襲から続いている「続裾」と呼ばれるスタイルです。

べて丈は少し短い、形状はほとんど同じ。束帯の単は原則として紅色に決まっているが、未成年は濃色を用い、宿老は白を用いた。現代の束帯の単は、天皇・東宮は夏・冬ともに紅染めの綾織物で、御文は四菱の繁文（菱が緻密な繁文）を用いることが標準である。表袴（うえのはかま） 袴も重ねてはくが表側に出るのが表袴。色はすべて白で、裏地は若年が濃色、その他は紅。身分と年齢により生地が異なった。表地より裏地が少し見えるおめりが特徴。また形は複雑で、股の部分に返り襠と呼ばれる帯のような部位があり、腰（帯）は一本がU字型に腰に回る形式で右腰で結ぶ。

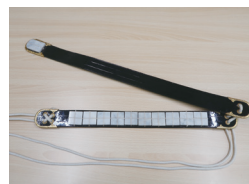
松井さん 表袴のおめりの下に大

■束帯の各部名称



画像提供/株式会社吉徳（男雛）・株式会社善勤商店（石帯）

男雛で解説



石帯



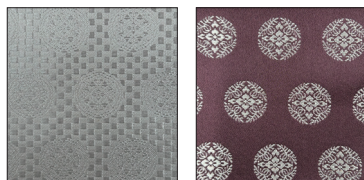
襪（しとうず）

赤丸の部分。履き口にある小紐で足首を括って留めて固定する。

口袴の色が見えています。そのため赤い部分が多く見えるのです。大口袴（おおくちのはかま） 表袴の下に着用するのが大口の袴。もともと肌着としての役割を担うものだった。「大口」というのは袴の裾が広く大きく見えることから付いた。大口は紅染めの生平絹を引き返して仕立てるもので、その色から「赤の大口」とも呼ばれる。老年は白の大口を用いていた。襪（しとうず） 足袋と違うのは、指の先が割れていない点。束帯以外の装束は素足が原則だが、位および天皇の許可があった場合のみ、履くことができた。「しとうず」は「下靴」が変化した名称とされている。色は白で生地は平絹。

◆表袴の生地と文様

若年	窠に霰浮織
壮年以降	八藤丸固織
殿上人・地下	無文で生地は平絹



窠に霰

八藤丸

松井さん 衣裳は掘り下げるとキリがないので、基本の解説はこちらで十分かと思えます。――今回も詳しく解説していただき、ありがとうございました。

参考文献
・仙石宗久著『十二単のはなし―現代の皇室の装い』(桐オクターブ、1995年)
・八條忠基著『有職装束大全』(桐平凡社、2018年)
・八條忠基著『素晴らしい装束の世界』(桐誠文堂新光社、2005年)
・鈴木敬三編『有職故実大辞典』(桐吉川弘文館、1996年)
・京都国立博物館編集 天皇陛下御在位十年記念『宮廷の装束』(NPO法人有職文化研究所、1999年)